

北米における人種イデオロギー

オードリー・スメドリー

(山下淑美訳)

人種という概念ほど、誤解と混乱に包まれているものも少ないだろう。そしてその理由は今やかなりよく知られている。人種を扱う学術書は西洋ではいまや何十万冊にもものぼり、それらの多くが人種の定義や特徴づけを試みているが、いまだにコンセンサスは得られていない。研究者のなかには、人種とは、見る者の眼差しの中に存在し、人種のカテゴリーはそれゆえ恣意的なものであると論じる者もいる。一方、合衆国における人種主義や人種間関係を研究する社会学者の多くは、こうした集団の存在やそれらを構成する人々については一般的同意が存在するので人種の定義など必要ないと思いついでいるようである。北米において日常的な場面で人種と言うとき、我々は一般にアフリカ出自の者やヨーロッパ人の子孫、先住アメリカ人(アメリカ・インディアン)、そして一九世紀以降のアジア系移民とその子孫を指す。さらに近年では、中・南米から移住してきたラティーノやヒスパニックと呼ばれる巨大なカテゴリーもある。これらの集団間ではかなり婚姻が進んでおり、またこれらいずれの集団もいまだかつて社会的文化的に同質的であったことはなかったという点で、こうした区分は曖昧なのである。

「人種主義」という語がどのような社会的現実の範囲で用いられてきたのか、あるいは用いられうるのかについては、それほど意見の一致は見られていない。例えば、どのような行動または出来事が「人種主義的」、あるいは「原初人種差別的」とか「半人種差別的」とか「準人種差別的」とみなされるべきなのか、また、ある行動や言葉づかい

が、段階に応じて、「比較的軽い」差別であるのか、「深い」差別であるのか、あるいはまた「極端な」差別であるのかといった点について、専門家たちは合意に到達できずにいる。⁽¹⁾ 実際のところ、人種、人種主義という二つの語はどちらもきわめて曖昧で、厳密な構成要素や外世界の指示対象物すら欠いているように思われる。

研究者たちが人種差別をどのように認識し、どのようなものとみなすのかは、彼ら自身が実際に人種差別を体験したことがあるかどうか、またその体験がどのような形であったかといった主観的要素に左右されることが多いため、問題はさらに複雑になる。合衆国の一見して明らかな黒人、インディアン、ラティーノの研究者および一般書の著者たちの大部分は、白人の優越意識に基づいて行動する人々から受ける侮辱、はずかしめ、無礼、すげない拒否、失礼な態度、時折の下品な言動、よくある無関心や軽蔑という日々の実体験として、人種を理解している。⁽²⁾ 他方、白人や多くの非白人の研究者は一般に、人種をその制度化された状態で取り扱い、例えば忌避的行動のさまざまなパターンや隔離の諸形態、労働・教育・賃金の不平等、警察の暴力などの露骨な差別行為などについて研究している。このように人種の問題は多様かつ複雑なため、人種や人種差別と関連する主要な問題をすべて一つの認識体系のなかに収めてしまうことは困難であろう。

人々を人種カテゴリーに分類する際に見解の一致が見られないのは、さらに大きな混乱を生み出しているもう一つの問題点があるからである。すでに見てきたように、名づけられた多くの人種とそれらのあいだの差異を明確に示す方法を学問が提供しているわけではない。人種をどのように定義し性格づけるのかは、しばしば研究者の個人的見解、とくにそれぞれの集団に対する個人的態度に左右されるのが現実である。例えば、ある研究者たちは、アメリカにおけるユダヤ人とは、他の白人（ヨーロッパ系人）とは異なる独自の人種ではなく、ヨーロッパで差別を経験したさまざまなエスニック集団の集合体なのであると主張する。また、例えばジョージ・フレドリクソンの最近の著作が示すように、ユダヤ人を、彼らの迫害の歴史ゆえに一つの「人種」集団とみなす研究者もいる (Fredrickson 2002)。歴史的には、ユダヤ人を人種として扱うようになったのは、比較的近年になってから、それも主にドイツにおいてのことである。彼らが生物学的に特異でありドイツ社会に同化できないという考え方は、一九世紀末に現れたものである。合

衆国では、ユダヤ人は、彼らのヨーロッパ人としての出自や表現型上の（身体的）特徴のためばかりではなく、明らかに皮膚の白さが有利に働いて、ごく当然のこととして白人のカテゴリのなかに組み込まれてきた (Bodkin 1998; Jacobson 1998)。ロマ（「ジプシー」）は、ヨーロッパおよび合衆国において、彼らの生活様式や文化的背景を理由として、しばしば異人種として認識されてきた。最近の例としては、合衆国で大部分がこれまで白人として受け入れられてきたアラブ系・中東系の人々が、二〇〇一年九月のニューヨーク世界貿易センター爆破事件で憤慨し神経過敏になったアメリカ人によって、かなり公然と人種化されるようになったことが挙げられる。

異なる社会の人種現象を比較しようとするとき、ただちに二つの問題が生じる。一つは、異なった社会集団に属する人々のあいだの関係が、どのような場合「人種的」といえるのかを明らかにしなければならないという問題である。今日「人種」という言葉やある種の人種的イデオロギーは、しばしば世界の多くの地域における紛争や対立的状況を指して用いられる。ジャーナリストやその他の著述家たちは「人種」という言葉を、例えばセルビア人とクロアチア人、日本人と韓国・朝鮮人、東アフリカのフツとツチの対立といった具合に、ヨーロッパ、アフリカ、アジアにおけるエスニック集団間の敵対関係に用いている。かつては文化的に異なるとされていた多くの集団が、人種的に異なるとみなされるようになった。つまり、その機会に乗じて、こうしたマイノリティないし下位集団に人種的なアイデンティティとレッテルが人為的に押しつけられたのである。地理的に隣接する人々との敵対関係も、しばしば「人種的な」性格を持ったものとして表現される。このような「他者」を「人種化する」プロセスは、後に述べるように、人間の差異を脚色し、誇張し、際立たせる方法として二〇世紀後半に加速し、そのまま二一世紀に引き継がれているように見える。明瞭な境界線をもつ集団同士の関係は時とともに変化し、その結果、人種概念それ自体も拡大や変形が加えられてきたのだ。

もう一つの問題は、人種のカテゴリが表現型を基にしたものである場合、適切で比較可能なカテゴリをどのように定義するのかという問題である。例えば合衆国において白人あるいは黒人と呼ばれる人々は、中・南米、あるいはまた南アフリカにおいて類似カテゴリに分類される人々とは異なっている。人種カテゴリもその定義の仕方も

一様ではないし、またそのようなカテゴリー間の境界自体も、柔軟性、浸透性、堅固さなどの度合いがそれぞれ異なっている。しかしながらこのことは、人種概念に関する一つの重要な事実を反映している。つまり人種という言葉には状況的、歴史的な次元が存在するということである。大多数のアメリカ人は理解していないが、合衆国内で認知された集団に対して用いられている人種カテゴリーが、合衆国外の集団に対して適用できないことは明らかだ。また人種は歴史上のある時期と他の時期とでは形が異なってくる。このことは、合衆国以外の、人種が社会組織上重要な要素となっている社会についてもいえることである。

最後に、人種あるいは人種主義の研究では、しばしば専門分野によって異なった視点からアプローチがとられている。例えば、ローレンス・ブラム (Blum 2002)、チャールズ・ミルズ (Mills 1997)、ユーディ・ウェブスター (Webster 1992) などの哲学者は、人種の研究に、社会科学や歴史学の研究者の著作には必ずしも見いだされない幅広い視野を、哲学や政治思想の分野から導入している。哲学者は、現在あるいは過去の哲学者、学者、知識人、有名人の著作や理論に依拠する傾向があるのだ。また、社会学と人類学という二つの分野にさえ、データの使い方、研究データの選択法、用いられる研究方法、到達する結論にしばしばかなりの違いがある。社会学者はどちらかといえば量的データなどハードな事実を用い、国勢調査のデータ、世論調査、面接調査などに基づいて、全体的動向という観点から分析する傾向があり、幼児死亡率や住宅所有率、収入、職種などにおける差異を分析するときと同様、統計的手段を利用して人種や人種間格差を語る。人類学者は、自然人類学者を除けば人種に関心を寄せる人は少なく、人種や人種のイデオロギーを生み出す民族誌的事実のほうに目を向けようとする。人種差別的な行動の説明を人種 (差別) 主義者と呼ばれる人々の心性に求めるといって、彼らはしばしば心理学者に非常に似ている (Gregory and Sarjet 1994 におけるいくつかの論文参照)。人類学者は、人種は社会的あるいは文化的現象であり人種の区分は社会的なものであるとして (Shanklin 1994)、人種に関する諸概念の歴史 (Baker 1988; Smedley 1999) や、ある人々の集団が人種とみなされるようになるプロセス (Brodkin 1998) を分析するのである。

ジャーナリストでありブロードキャスターであるキナン・マリック (Malik 1996) の見解に賛同する研究者も

いる。彼は、人種概念は「あまりにも複雑で多面的なので、一つの単純な定義に押し込めてしまうことはできない」(Malik 1996: 71)というが、この複雑さは、私が先に示唆したように、人種研究へのアプローチの多様性から引き起こされるものである。さらに、今日の学者の多くは、人種は社会的構築物であると主張しながら、依然として生物学的特徴を人種の定義や分析の一構成要素として用いている。とくにアメリカ人は身体的特徴に言及せずに人種を論じることが難しいと考えている。私が次に考察するのは、こうした生物学に対する強い執着についてである。

生物学的実体としての人種と人間の行動との混同

合衆国や他の西洋諸国では数百年ものあいだ、一般の人々も学者たちも、ある地域の住民を人種識別の指標とされる生物身体的特色に基づいて分類したものが人種であるとみなしてきた。その結果、ほとんどのアメリカ人が、個人や集団のなかに皮膚の色、顔の特徴、目の形、鼻の形や大きさ、毛髪の形状などの多様性を認めた場合、いつどんな場所でも、それを「人種」あるいは人種の違いとみなすようになった。これらの表現型上の特徴が人種の指標とされているため、とくに西洋諸国においては、多くの人々が人種は「自然に基づいた」カテゴリーであると考えている(Carnill 1995; Keita and Kittles 1997 参照)。

人種を見分けるうえでマーカーとして表現型上の特徴を拠り所としているにもかかわらず、アメリカ人たちは、一見たいした混乱もなく、その人種的地位と結びついた特徴をそなえていない個人や家族の存在を受け入れている。例えば、黒人アメリカ人のなかには、皮膚の色が明るく、鼻は細く、唇が薄く、髪も縮れておらずウェーブか直毛の人々もいるのだ。アフリカ系アメリカ人とされる人々の特徴の差異の振幅は、一方の極からもう一方の極まで広範囲に及ぶものだ。これは合衆国では、アフリカ系の出自と知られている人はすべて黒人人種であると考えられているためである。同様に、先住アメリカ人の多くは、自らを「インディアン」と認識しているが、外見はむしろ彼らのヨーロッパ系の祖先に似ている。さまざまな社会状況において、彼らは言葉のうえでインディアンと名乗ることを要請

されるのだ。また今日、アフリカ以外からの移民のなかにも、黒人アメリカ人の諸特徴に似た身体的特質をもつ人々が数多く存在する。彼らには中東、北アフリカ、南太平洋、中・南米などの出身者だが、その茶色や焦げ茶色の皮膚と縮れた毛髪ゆえに、しばしば白人アメリカ人によって黒人と認識される。こうした状況の下では、どの人種に属するかは非常に混乱を招きやすいものとなってくる。とくに、自分がいかにふるまい、相手にどう接するかについての指針を表現型上の特徴に求めようとする人々にとってはそうである。

そうした混乱と複雑さが、大部分のアメリカ人の人種理解にはともなう。彼らの人種理解は、身体的特徴と人種的行動に関するさまざまな推測を融合させて一つの系統だった現象とみなすものであるが、それは経験的事実を無視することであり立っているからである。アメリカ人は、自分と人種的に異なった人々は、行動、道徳、気質、知性のうえでも当然異なっているであろうと予測する。黒人アメリカ人と白人アメリカ人では、音楽、美術、ダンス、文学、食習慣、服装、さらには家庭生活や宗教にいたるまで文化の諸領域に関して当然異なっているものだとつねに想定される。また一般に、それぞれの人種の構成員は、白人文化か黒人文化のいずれか一方だけを体現するものと仮定されている。しかし、純粹に民族誌的な見地に立つならば、すべてのアメリカ人の間には、人種の境界よりもそれを横断する階級差のほうが大きく存在するのだということが証明できるだろう。中産階級に属する黒人アメリカ人、アジア系アメリカ人、白人アメリカ人が互いに文化的にきわめて似ていることを授業で話すと、アメリカ人の学生たちはシヨツクをあらわにし、数々の民族誌的類似点を指摘されるまで納得しない。同様に、大多数のアメリカ人は、今日、中国系人は八世代、日系人は最高六世代目まで存在し、その家族が文化的には完全なアメリカ人であるということをししばしば理解していない。彼らの現在の子孫たちは、祖先の文化や特徴的な行動について何も知らない可能性さえある。生物身体的実体と文化的行動やアイデンティティとの混同は、アメリカ人が向きあわねばならない人種をめぐる事実のなかでも最も予期せぬ事実であろう。しかし、それを克服したからといってアメリカ人が、人種の意味を考え直し、生物学的な根拠をもたず特有の遺伝的行動パターンとも関連のないものとみなすようになるわけではないだろう。

西洋人は表現型という点から人種を見るので、西洋の研究たちは、人種が歴史のあらゆる場面に存在したと想定

した。例えばトマス・ゴセットは、古代エジプトの墓に描かれた絵や、アーリア人のインド侵入についての古いリグ・ヴェーダの叙述や、「黄髪、碧眼の野蛮人」と異人社会を描写した紀元前三世紀の中国漢時代の著作などのなかに、さまざまな人種を見ている (Gossett 1963: 4)。現代の歴史家は、過去に、異なった人間集団について身体的特徴が描写されていれば、ほぼすべての場合、それは「人種」の存在を示すものと解釈してきた。これは描写や記述が否定的なものである場合、あるいは二つの集団間に敵意が存在する場合にとくに当てはまるであろう。しかしながら、人種意識が近代の現象である以上、過去の人々によって表明された他集団についての否定的な見方は、人種差別的偏見の反映として解釈すべきではない。古代エジプトの墓壁に描かれた肖像画は、画家が目にした身体的特徴をそのまま表現しているにすぎないのだ。たしかに東地中海や北アフリカでは相互に交流をもつ多くの集団で、過去においてまた現在でも、皮膚色、顔の特徴、髪の状態にかなりの多様性が見られるからだ。描写それ自体はたんに画家の目とおした個々人の表現型上の特徴を反映したものにすぎず、これらの人々についてはかに何を語るものでもない。「人種的に」なんら異なるらない場合でも、隣接集団について否定的に記述することは、歴史的文献のなかで広く見られるものである。

大多数の歴史書、とくに異集団間の紛争についての書物を著わすために、一九七〇年代の研究者たちはこうした状況の総体をよりの確に示す、疑問の余地のない英語の(またその他のヨーロッパ語の)用語を再確立した。それはエスニシテイ、あるいはエスノセントリズム(自民族中心主義)という用語である。エスニシテイという語は、とりわけ人類学者によって、文化的グループ分けのために、すなわち共通の言語、宗教、歴史、価値観、信念などを持つ人々を指すために使われてきた。同じ地域に住み、文化的アイデンティティを共有したうえで、さらに自分たちの生活様式が他よりも優れたものであると信じることは、人間の経験のうちでも後天的に習得されるものであり、その文化の担い手の表現型上の特徴とはなんの関係もない。人々は長い歴史のなかで、他集団について、自分と身体的に類似しているか否かにかかわらず、しばしば否定的な、主観的な考えを表明してきた。⁽³⁾多くの集団があらゆる場所で「他者」に関するステレオタイプを抱くが、それは人種という近代の概念とは無関係である。

エスニシテイは、人間のアイデンティテイのうちの後天的に習得された側面を反映するものである。それが人間の生物学的側面とは無関係であり、変化しうるものであるということを、あらゆる地域の人々（とくにアメリカ人）は理解しなければならぬ。今日のアメリカ人の祖先たちはすべて、現在の彼らとは文化的に異なっていたはずだ。人々はいつの時代にも世界のある地域から別の地域へと移動し、新しい言語を学び、新しい宗教に改宗し、衣食に関する習慣やその他の新しい文化的特徴を獲得するのだ。あるレベルにおいては、エスニック（文化的）な特徴の後天性、つまりそうした特徴は非本質的で一時的なものであるということについては、大部分の研究者が同意している。

人間のアイデンティテイの真の基盤としてのエスニシテイと、アイデンティテイとは無関係な生物学的特徴の多様性を認識上区別する必要がある——このことを、すべての研究者、ジャーナリスト、作家、社会批評家、政治家たちが理解し受け入れるならば、有益で意義深いことであろう。この二つの現象には質的な違いがあり、人間の行動に及ぼす影響がまったく異なっているからである。しかし人種概念のもつ力は、人間の差異について我々が研究者として到達しようとしている客観的理解の代わりに、一種の本能的・神話的な理解と知識をもたらすのである。

この生物学的側面と行動との認識上の区別は、人種神話の影響を強く受けた行動に関する偏見とはまったく無縁なものでなければならぬ。このことは、おそらく大半の人類学者によく理解されるであろうが、残念ながら、なかには、人種がエスニックな領域に吸収され「人種」がエスニシテイのひとつの指標となってしまうことを、ここ何十年間かの退行現象（Harrison 1998 参照）と見て、警鐘を鳴らす者もいる。彼らはまた、「文化」が本質的なものとされるようになり、人種と同義語にすぎなくなってしまうた、とも主張する（Gilroy 2000 参照）。こうした学者たちは、「多文化主義」や多民族社会の積極的価値を唱える人々が、しばしばエスニシテイ（文化）を、あたかも「人種」同様、永久不変なものであるかのように扱っていると感じている（Gilroy 2000; Harrison 1995; Malik 1996）。これらの批判者たちは、現代社会についての多くの書き手や観察者の心性において、文化と人種が融合してしまっているのを見るのである。しかし現実には、エスニシテイという用語は比較的最近のものであるとしても、行動的特徴が共通するという神話は、つねに人種概念の中心的要素であった。すべての人種が特有の、「自然な」あるいは生得的な行動形

態を持つという理解は、早くも一八世紀において「人種」意識の重要な部分であった (Smedley 1999)。これは一九世紀に一つの強力なイデオロギーへと練り上げられる本質主義的見解であり、南北戦争（一八六一―一八六五年）以後発展した人種的世界観にとって非常に重要なものであった。なぜならそれは「差異」と「分離」という二つのテーマの拡大と存続に最も強力な論拠を提供したからである。合衆国全体にゆきわたった人種の隔離という理念の全体が、黒人やインディアンは、白人とはエスニシティ上（文化的に）異なった、白人より劣った存在であり、こうした差異は生得的で克服不可能であるという考えに基づいたものであったし、今もそれは変わっていない。

一九四〇年代、生物学的実体としての人種について、最初に疑いの声をあげたのは人類学であった。二〇世紀末には、大多数の学問分野で、人種は人間の差異自体ではなく、差異について文化的に構築されたイデオロギーであるというコンセンサスが広がっていった。

歴史が語るもの

私が入種概念を考察する際に採用する視点は、この概念がいかにして、またどのような状況で北米の歴史に登場したのかを探るといふものである。西洋世界の大部分の社会学者は、人種概念は過去数世紀間に北米、南アフリカ、オーストラリアにおいて最大の発展形態に達したということと一致している。また「人種」概念が歴史に登場したのは、ヨーロッパ人による航海と世界の他地域への植民活動以後のことであるという点でも、見解が一致している (Allen 1994; 1997; Fredrickson 1987; 2000; Hanaford 1996; Smedley 1999)。植民活動を行ったすべての国家が、被征服民あるいは奴隷化された人々に対して同じ態度をとるようになったわけではないが、当時、植民地化のプロセスに担った国家には多くの共通点があった。大量の労働力を獲得し統制しなければならぬという切迫した必要性がその一つである。

人種研究に対する私のアプローチは、いくつかの考察に基づくものである。一つは、今や権威ある研究者が異口同

音に唱えているように、人種が近代の概念であるとすれば、我々はそれを文化的構築物として扱わなければならない、つまり人種は自然界の何かに由来するものではなく、その意味するところは、まさにその社会の歴史的、社会的状況特有のものであるということである。第二には、〈古代社会〉の歴史を検証してみると、〈古代人〉のイデオロギーのなかには、相互交流をもつ集団間に大きな身体的差異が存在するにもかかわらず、人種のような現象、少なくとも今日我々が知っている形でのそれと比較できる現象が、いかなる形でも見いだされないということである (Snowden 1983; Smedley 1998)。第三に、人種と人種差別は、人間の行動、世界についての考え方や他の人間との相互作用にかかわるもの、すなわちポストモダンの論者たちのいう言説の一形態だということである。人種は、根本的に、人間の客観的差異それ自体ではなく、差異についての態度や考え方とかかわるものなのである。

『北米における人種』(Smedley 1998)のなかで、私は、合衆国における人種概念の構成要素を一九世紀、二〇世紀におけるその発展のなかで同定し明確化することを試みた。本論文は、我々の文化が体験した過去の民族誌的事実を参照することによって、人種に関する言説を幾分なりとも明らかにすることを意図したものである。アメリカ社会における人々の態度や、活字にされている、あるいはされていない考え方に目を向けながら、私はこの現象を、アメリカ史の一部として発展した根源的な社会的価値観という角度から分析する。合衆国では、人種は、人間の差異についてのあるまとまりをもった態度や信念として生まれ、イデオロギーのあるいは世界観、つまり社会全体があらゆる人間の差異を認識し解釈する方法として、制度化されていった。しかし人種イデオロギーは単なる差異の認識にとどまらない。このようなきわめて特殊な社会的目的のために構築された差異は、それらにまつわるフィクション性を反映するものでもある。それはまた、現実社会とは裏腹に、平等、正義、自由、民主主義などの精神を標榜する社会に、永遠に不平等な集団が確固として存在しているという事実を反映するものでもあるのだ (Fields 1982)。

人種を世界観として規定することによって意図するのは、人種概念から、個々の書き手によって表現された世界の諸集団についての個人的感想という意味あいを取り除くことである。それはまた、人種差別的なものであるのか、エスノセントリズムに基づいたものであるのかという、相互作用の種類についての曖昧さを幾分か解体することもね